領で飯山川に落合ふ。流程八粁許。

シロタ　代田　↓シナンタ　代田。

シロビクニ　白比丘尼　能登では白比丘尼の植ゑたといふ老樹が往々に在る。能登名跡志に、『若狭の白比丘尼の舊跡所々に在り。是は伊勢國白子の驛の產なるにより、白比丘尼ともいひ、又八百比丘尼ともいへり。又越中黑部庄玉椿といふ所の產ともいへり。如何にも長生して八百年の事を知れり。何れも廻國して、常は若狭國白椿山に在りしとて今に繪像あり。手に椿の枝を持ちてあり云々。又能登國鳳至郡繩又村の產ともいへり。』と見える。この尼のことは、中原康富記に『文安六年五月若狭白比丘尼上洛』、又臥雲日件錄文安六年七月廿六日の條に、『近時八百歳老尼若州より洛に入』とも見えるが、能登の關する所でない。

シロブシンサンブヤク　城普請三分役　↓フシンギン　普請銀。

シロマル　白丸　珠洲郡木郎郷に屬する部落。能登名跡志白丸村の條に、『をかたといふて古き百姓あり。又氏神を尻高の宮といふ也。此の邊にて尻高といふ貝の大なるが、毎歳八月朔日祭禮にあがる也。神前に備ふる也。』とある。

シロミ　白見　石川郡湯涌郷に屬する部落。

シロミガハ　白見川　石川郡白見領山のしやうだつといふ所より流出し、羽場の下で淺野川に入る。流程八粁許。

シロミダニ　白見谷　石川郡高尾山の西北なる溪谷で、その水湯涌を經て淺野川に注ぐ。

シロヤマ　城山　能美郡上野の部落から南方に在つて、鳥越城のあつた山。高さ三一二米。

シロヨネ　白米　鳳至郡南志見郷に屬する部落。能登誌に、『白米村に境といふ所あり。是は昔鳳至郡四庄成し比、大屋と待野との庄境といひ傳ふ。』とあるが、能登志徵には、ここにいふ四庄は四郷の誤で、小屋郷と待野郷との境界であつたのであるとしてゐる。

シロヨネザカ　白米坂　鳳至郡白米のうちにあり、寶永元年一覽記に、『しろよねといふを下り、濱を行。坂の下に白米村あり。』とある。この白米坂は、珠洲郡の白米坂（ハクマイ）と別である。

シロヲヤソウエモン　城尾屋惣右衞門　延寶元年金澤南町の盲者城尾屋惣右衞門といふ者、士人の子弟を敎唆して惡行を働かしめた。その事實は、武家混目集に『此者共犯罪は、遊興女色にふけり、過分の金銀を費し、剩へ町人城尾屋が巧に一味し、金銀利潤の方便、侍に不似合行狀共張行故、右被仰付者也。』とあるによつて略知られる。この事件は同年十二月露顯し、城尾屋は直に逐電したが、三河池鯉鮒に於いて藩士鶴見三丞等の爲に發見斬殺せられ、その他一味の士人にして死刑・流刑以下に處せられたもの廿一人に達した。次いで前田綱紀は二年二月廿四日自筆の書を以て老臣に訓諭し、方今大小臣僚行跡の正しい者甚だ稀であるから、此の如き徒輩を生ずるの當然なるをいひ、政道の宜しきを得て薫化することの必要を述べた。

ジロンキ　自論記　一册。前田光高が寛永十九年廿八歳の著で、漢文を以て天地人倫の道を說いたものである。

シヲ　志乎　↓シヲヂ　志乎路。

シヲ　志雄　羽咋郡邑知院内志雄庄にある部落。大永六年十月一宮社務職年貢米錢納帳に、『志雄羽喰吉野屋邑智分』とし、又志雄西町・志雄東町とも見えるが、享祿四年七月一宮惣分目帳にはしをと書いて、既に志雄を後世子浦と書く端緒が見える。しかし元祿の郷村名義抄には尙志雄町と書いてある。

シヲイヅモジンジヤ　志雄出雲神社　羽咋郡子浦の丘上に鎭座して、神明とも稱し、貞享の頃は山伏寶勝院、後に明樂寺之に奉仕した。或は式内志乎神社たることを主張したが、その謂れがない。

シヲゴエタウゲ　志雄越峠　羽咋郡子浦から越中氷見に至る道路の國境で、藩政時代に巡見上使の通過した臼ヶ嶽越といふも之に同じい。

シヲゴエヤマ　志雄越山　羽咋郡に屬する。得江文書觀應二年正月得江石王丸代長野彦五郎季光申軍忠狀に、『去年十月廿日於越中國凶徒打出、同廿三日責來同國氷見湊之間、堀切石王丸一族等所領志雄越山（能州）令警固、致度々合戰訖。』とあり、志雄越山は今の志雄越の峠である。

シヲシヨウ　志雄庄　羽咋郡に在つた。承久三年注進の能登國田數目錄に、『志雄庄、參拾町、久安二年立券狀』と見え、能登國田數目錄解には、『志雄庄、蓋し和名抄高家郷の域なるべし。』とある。後世亦邑知院内志雄庄がある。

シヲシヨウ　志雄庄　羽咋郡に屬し、詳しくは邑知院内志雄庄といひ、藩政時代では、敷波・敷浪・針山・原・荻島・荻谷・荻市・子浦・聖川・新宮・下石・當熊・海老坂の十三ヶ村を含んで居た。

シヲジンジヤ　志乎神社　羽咋郡荻島・荻谷・敷浪の入會地に鎭座する。式内等舊社記に、『志乎神社。式内一座。志雄庄志雄山鎭座。祭神月讃命。志雄一庄之惣社。今稱=鍵取明神=。』とある。

シヲノ　志雄野　羽咋郡子浦附近から飯山邊に至る間で、古へは荒野であつたといふ。

シヲヂ　志乎路　萬葉集十七大伴家持の歌に、『之乎路可良多太古要久禮婆波久比能海云々』とある。家持は越中の國府から氷見へ出で、所謂志雄越を通つて、之乎卽ち今の羽咋郡子浦に來たのであるが、當時の順路は必ずしも今と同じくはないやうであるといふ。

シヲホ　志雄保　羽咋郡に在つた。承久三年注進の能登國田數目錄に、『地頭陣國岡本大三入道志雄保、拾貳町壹段八、承久元年立券狀』とあり、得江文書觀應二年正月得江石王丸代長野彦五郎季光申軍忠狀には、『十二月一日寄來石王丸等領内志雄保之間云々』とも見える。能登國田數目錄解に、『氣多神社正長元年文書に、志雄庄地頭飯尾善四郎左衞門重淸とあつて、當時庄と保と並び立ちしなり。三州志を按ずるに今は保の名絶えたり。』と記してゐる。

シヲヤマ　志雄山　羽咋郡子浦の東南一帶の山脈である。志乎山・志保山とも書く。藩永二年の役に、平軍の本隊が倶利伽羅に赴くと同時に、その一支隊を分かつて志雄山に向かはせ、こゝで源行家の軍を禦いだが、本隊の敗報を得て退却した。

シンエ　眞慧　下野高田專修寺十代。永享